# 化銀杏

泉鏡花

# 一

貸したる二階は二間にして六畳と四畳半、別に五畳余りの物置ありて、月一円の極（きわめ）なり。家主（やぬし）は下の中の間の六畳と、奥の五畳との二間に住居（すま）いて、店は八畳ばかり板の間になりおれども、商売家（あきないや）にあらざれば、昼も一枚蔀（しとみ）をおろして、ここは使わずに打捨てあり。

往来より突抜けて物置の後（うしろ）の園生（そのう）まで、土間の通庭（とおりにわ）になりおりて、その半ばに飲井戸あり。井戸に推並（おしなら）びて勝手あり、横に二個（ふたつ）の竈（かまど）を並べつ。背後（うしろ）に三段ばかり棚を釣りて、ここに鍋（なべ）、釜（かま）、擂鉢（すりばち）など、勝

手道具を載（の）せ置けり。厠（かわや）は井戸に列してそのあわい遠からず、しかも太（いた）く濁りたれば、漉（こ）して飲用に供しおれり。建てて数十年を経たる古家なれば、掃除は手綺麗（てぎれい）に行届きおれども、そこら煤（すす）ぼりて余りあかるからず、すべて少しく陰気にして、加賀金沢の市中にてもこのわたりは浅野川の河畔一帯の湿地（しけち）なり。

　園生は、一重の垣を隔てて、畑造りたる裏町の明地（あきち）に接し、李（すもも）の木、ぐみの木、柿の木など、五六本の樹立（こだち）あり。沓脱（くつぬぎ）は大戸を明けて、直ぐその通庭なる土間の一端にありて、上り口は拭（ふ）き込みたる板敷なり。これに続ける六畳は、店と奥との中の間にて、土地の

方言茶の室と呼べり。その茶の間の一方に長火鉢を据えて、背に竹細工の茶棚を控え、九谷焼、赤絵の茶碗、吸子など、体裁よく置きならべつ。うつむけにしたる二個の湯呑は、夫婦別々の好みにて、対にあらず。

細君は名をお貞と謂う、年紀は二十一なれど、二つばかり若やぎたるが、この長火鉢のむこうに坐れり。細面にして鼻筋通り、遠山の眉余り濃からず。生際少しあがりて、髪はやや薄けれども、色白くして口許緊り、上気性と見えて唇あれたり。ほの赤き瞼の重げに見ゆるが、泣はらしたるとは風情異り、たとえば炬燵に居眠りたるが、うっとりと覚めしもののごとく

涼しき眼の中（うち）曇を帯びて、見るに俤（おもかげ）晴やかならず、暗雲一帯眉宇（びう）をかすめて、渠（かれ）は何をか物思える。根上りに結いたる円髷（まるまげ）の鬢（びん）頬に乱れて、下〆（したじめ）ばかり帯も〆めず、田舎の夏の風俗とて、素肌に紺縮（こんちぢみ）の浴衣を纏（まと）いつ。あながち身だしなみの悪きにあらず。

教育のある婦人（おんな）にあらねど、ものの本など好みて読めば、文（ふみ）書く術（すべ）も拙（つたな）からで、はた裁縫の業（わざ）に長（た）けたり。

他の遊芸は知らずと謂う、三味線（さみせん）はその好きの道にて、時ありては爪弾（つめびき）の、忍ぶ恋路の音（ね）を立つれど、夫は学校の教授たる、職務上の遠慮ありとて、公に弾（ひ）くことを禁じたれば、留守の間を見計らい、細棹（ほそざお）の塵（ちり）を

払いて、慎ましげに音〆（ねじめ）をなすのみ。

お貞は今思出したらむがごとく煙管（きせる）を取りて、覚束無（おぼつかな）げに一服吸いつ。

渠（かれ）は煙草（たばこ）を嗜（たしな）むにあらねど、憂（うき）を忘れ草というに頼りて、飲習わんとぞ務むるなる、深く吸いたれば思わず咽（む）せて、落すがごとく煙管を棄（す）て、湯呑に煎茶をうつしけるが、余り沸（たぎ）れるままその冷（さ）むるを待てり。

時に履物の音高く家（うち）に入来（いりく）るものあるにぞ、お貞は少し慌（あわた）だしく、急に其方（そなた）を見向ける時、表の戸をがたりとあけて、濡手拭（ぬれてぬぐい）をぶら提げつつ、衝（つ）と入りたる少年あり。

お貞は見るより、
「芳さんかえ。」
「奥様（おくさん）、ただいま。」
と下駄を脱ぐ。
「大層、おめかしだね。」
「ふむ。」
と笑い捨てて少年は乱暴に二階に上るを、お貞は秋波（ながしめ）もて追懸けつつ、
「芳ちゃん！」
「何？」
と顧みたり。

「まあ、ここへ来て、ちっとお話しなね。お祖母様(ばあさん)は
いま昼寝をしていらっしゃるよ。騒々しいねえ。」
「そうかい。」
と下りて来て、長火鉢の前に突立(つった)ち、
「ああ、喉(のど)が渇く。」
と呟(つぶや)きながら、湯呑に冷(さま)したりし茶を見るより、無
遠慮に手に取りて、
「頂戴。」
とばかりぐっと飲みぬ。
「あら！　酷(ひど)いのね、この人は。折角冷しておいたも
のを。」

わざと怨(えん)ずれば少年は微笑(ほほえ)みて、

「余ってるよ、奥様はけちだねえ。」

と湯呑を返せり。お貞は手に取りて中を覗(のぞ)き、

「何だ、けも残しゃアしない。」

と底の方に残りたるを、薬のように仰ぎ飲みつ。

「まあ、芳(よッ)さんお坐ンな、そうしてなぜ人を、奥様々々ッて呼ぶの、嫌なこッた。」

「だって、円髷に結ってるもの、銀杏返(いちょうがえし)の時は姉様(ねえさん)だけれど、円髷の時や奥様だ。」

## 二

お貞はハッとせし風情にて、少年の顔を瞻（みまも）りしが、腫（はれ）ぼったき眼に思いを籠（こ）め、

「堪忍おしよ、それはもう芳さんが言わないでも、私はこの通り髪も濃くないもんだから、自分でも束ねていたいと思うがね、旦那が不可（いけない）ッて言うから仕様がないのよ。」

「だからやっぱり奥様（おくさん）じゃあないか。」

と少年は平気なり。お貞はしおれて怨（うら）めしげに、

「だって、他（ほか）の者（もん）なら可（い）いけれど、芳さんにばかりは奥様ッて謂われると、何だか他人がましいので、頼母（たのも）

しくなくなるわ。せめて「お貞さん」とでも謂っておくれだと嬉しいけれど。」
とためいきして、力なげなるものいいなり。少年は無雑作に、
「じゃあ、お貞さんか。」
と言懸けて、
「何だか友達のように聞えるねえ。」
「だからやっぱり、姉（ねえ）さんが可いじゃあないかえ。」
「でも円髷に結ってるもの、銀杏返だと亡（なく）なった姉様（ねえさん）にそっくりだから、姉様だと思うけれど、円髷じゃあ僕は嫌だ。」

と少年は素気（そっけ）なし。

「じゃあまるであかの他人なの？」

「なにそうでもないけれど。……」

少年は言淀（いいよど）みぬ。お貞は襟を掻合（かきあわ）せ、浴衣の上前を引張（ひっぱ）りながら、

「それだから昨日（きのう）も髪を結わない前に、あんなに芳さんにあやまったものを。邪慳（じゃけん）じゃあないかね。可（いい）よ、旦那が何といっても、叱られても大事ないよ。私やすぐ引毀（ひっこわ）して、結直して見せようわね。」

お貞は顔の色尋常（ただ）ならざりき。少年は少し弱りて、

「それでなくッてさえ、先達（こないだ）のような騒（さわぎ）がはじまる

ものを、そんなことをしようもんなら、それこそだ。僕アまた駈出(かけだ)して行(ゆ)かにゃあならない。」

「ほんとうに、あの時は。ま、どうしようと思ったわ。

芳さんは駈出してしまって二晩もお帰りでないし、おばあさんはまた大変に御心配遊ばしてどうしたら可(よ)かろうとおっしゃるし、旦那は旦那でものも言わないで、黙って考え込んでばかりいるしね、私はもう、面目ないやら、恥かしいやら、申訳がないやらで、ぼうッとしてしまったよ。後で聞くと何だっさ、真蒼(まっさお)になって寝ていたとさ。

芳様(さん)の跫音(あしおと)が聞えたので、はッと気が着いて駈出し

たが、それまでどうしていたんだか、まるで夢のようで［＃「夢のようで」は底本では「夢のやうで」］、分らなかったよ。」

　少年は頻《しき》りに頷《うなず》き、

「僕はまた髯《ひげ》がさ、（水上《みなかみ》さん）て呼ぶから、何だと思って二階から覗《のぞ》くと、姉様《ねえさん》は突伏《つっぷ》して泣いてるし、髯は壇階子《だんばしご》の下口《おりぐち》に突立《つった》ってて、憤然《むっ》とした顔色《かおつき》で、（直ぐと明けてもらいたい。）と失敬ことを謂うじゃあないか。だから僕は不愉快で堪《たま》らないから、それからそのまんまで、家《うち》を出て、どこか可い家があったらと思ったけれど、探す時は無いもんだ。それから友達の処《ところ》へ泊っ

て、牛を奢ってね、トランプをして遊んでいたんだ。僕あ一番強いんだぜ。滅茶々々に負かして悪体を吐いてやると、大変に怒ってね、とうとう喧嘩をしちまったもんだから、翌晩はそこに泊ることも出来ないので、仕方が無いから帰って来たんだ。」

　お貞は聞きつつ睨む真似して、

「憎らしいねえ。人の気も知らないで、お友達とトランプも無いもんだね。気が違やあしないかと、私や自分でそう思った位だのにさ。」

「でも僕あ帰った時、（芳さん！）って奥から出て来た、あの時の顔にゃ吃驚したよ。暮合ではあるし、亡

なった姉さんの幽霊かと思った。」

「いやな！　芳さんだ。恐いことね。」

お貞は身震いして横を向きぬ。少年は微笑（ほほえ）みたり。

「何だ、臆病（おくびょう）な。昼じゃあないか。」

「でもそんなことをお言いだと、晩に手水（ちょうず）に行（ゆ）かれやしないや。」

「そんなに臆病な癖にして、昨夜（ゆうべ）も髯と二人連（づれ）で、怪談を聞きに行ったじゃあないか。」

お貞はまじめに弁解（いいわけ）して、

「はい、ですから切前（きりまえ）に帰りました。切前は茶番だの、落語だの、そりゃどんなにかおもしろいよ。」

「それじゃもう髯の御機嫌は直ったんだね。」

## 三

「別に直ったというでもないけれど、まああんなものさ。あれでもね、おばあさんには大変気の毒がってね、（お年寄がようよう落着なされたものを、またお転宅は大抵じゃアあるまいから、その内可い処があったら、御都合次第お引越しなさるが可し、また一月でも、二月でも、家においでになっても差支えはございませんから）ッて、それッきりになってるのよ。そのかわり

ね、私にゃ、（芳さんと談話（はなし）をすることは決してならない）ッて、固くいいつけたわ。やっぱり疑ぐっているらしいよ。」

　少年は火箸（ひばし）を手にして、ぐいぐい灰に突立てながら、不平なる顔色（かおつき）にて、

「一体疑ぐるッて何だろう。僕のおばあさんにもね、姉様（ねえさん）、髯（ひげ）が、（お孫さんも出世前の身体（からだ）だから、云々（うんぬん）が着いてはなりますまい。私は、私で、内の貞に気を着けますから、あなたもそこの処おぬかりなく。）ッさ。内証で言ったそうだ。変じゃないか、え、姉様、何を疑ぐッているんだろう。何か僕と、姉様と、不道徳な

関係があるとでもいうことなんかね、それだと失敬極まるじゃあないか、え、姉様。」

と詰り問うに、お貞は、

「ああ。」

と生返事、胸に手を置き、差俯向く。

少年は安からぬ思いやしけむ。

「じゃあ何だね、こないだあの騒ぎのあった前に、二人で奥に談話をしていた時、髯が戸外から帰って来たので、姉様は、あわアくって駈出したが、そのせいなの？　一体気が小さいから不可いよ。いつに限らずだ。人が、がらりと戸を開けると、何だか大変なことでも

見付かったように、どぎまぎして、ものをいうにも呼吸（いき）をはずまして、可訝（おかし）いだろうじゃないか。先刻（さっき）僕の帰った時も、戸をあけると、吃驚（びっくり）して、何だかおどおどしておいでだったぜ。こないだの時だってもそうだ。髯に向って、（いらっしゃいまし）自分の亭主を迎えるとって、（いらっしゃいまし）なんて、言う奴があるものか。何だってそう気が小さくッて、物驚きをするんだなあ。それだから疑ぐられるんだ。不可（いけない）ねえ。」

お貞は淋しげなる微笑（えみ）を含み、

「そういってながら芳さんもあの時はやっぱりそそッかしく、二階へ駈（か）け上ったじゃあないかね。」

少年は別に考うる体（てい）もなく、
「そりゃ何だ、僕は何も恐（こわ）いことはないけれど、あの髯が嫌だからだ。何だか虫が好かなくッて、見ると癪（しゃく）に障るっちゃあない、僕あもう大嫌（だいきらい）だ。」
と臆面（おくめん）もなく言うて退（の）けつ。渠（かれ）は少年の血気にまかせて、後前（あとさき）見ずにいいたるが、さすがにその妻の前なるに心着きけむ、お貞の色をうかがいたり。
お貞は気に懸けたる状（さま）もなく、かえって同意を表するごとく、勢（いきおい）なげに歎息して、
「誰が見てもちがいはないねえ。私だってやっぱり嫌だわ。だがね、芳ちゃんは、なぜ好かないの。」

少年はお貞の言(ことば)の吾が意を得たるに元気づきて、声の調子を高めたり。

「他(ほか)にね、こういって、まだ此家(ここ)へ来て、そんなに間もないこったから、どこにどうという取留めたこともないけれど、ただね、髯の様子がね、亡なった姉様の亭主に肖(に)ているからね、そのせいだろうと思うんだ。」

「そうして、不可(いけな)いお方だったの。」

少年はそぞろに往時を追懐すらむ、慨然(がいぜん)としたりけるが、

「不可いどころの騒(さわぎ)じゃない、姉様を殺した奴だも

の。」

お貞は太(いた)く感ぜし状(さま)にて、

「まあ。」

とそのうるみたる眼を睜(みは)りぬ。

「酷(ひど)い人ね、何だッてまた姉様を殺したんだろうね。芳さんのお姉様(あねえさん)なら、どんなにか優しい、佳(い)い人だったろうにさ。」

「そりゃ、真実(ほんとう)に僕を可愛がってくれたッちゃあないよ。今着ている衣服(きもの)なんか、台なしになってるけれど、姉様がわざと縫って寄来(よこ)したもんだから、大事にして着ているんだ。」

「そのせいで似合うのかねえ。」

とお貞は今更のごとく少年の可憐なる状（さま）ぞ瞻（みまも）られける。水上芳之助は年紀（とし）十六、そのいう処、行う処、無邪気なれどもあどけなからず。辛苦のうちに生（おい）たちて浮世を知れる状見えつ。もののいいぶりはきはきして、齢（よわい）のわりには大人びたり。

## 四

要なければここには省く。少年はお蓮（れん）といえりし渠（かれ）の姉が、少（わか）き時配偶を誤りたるため、放蕩（ほうとう）にして軽薄

なる、その夫判事なにがしのために虐遇され、精神的に殺されて入水して果てたりし、一条の惨話を物語りつ。語（ことば）は簡に、意は深く、最もものに同情を表して、動かされ易きお貞をして、悲痛の涙に咽（むせ）ばしめたり。

語を継ぎて少年言う。

「姉様（ねえさん）もやっぱり酷（ひど）いめにあわされるから、それで髯（ひげ）が嫌なんだろう。」

折からぶつぶつと湯の沸返（にえかえ）りて、ぱっと立ちたる湯気に驚き、少年は慌（あわただ）しく鉄瓶の蓋（ふた）を外し、お貞は身を斜（ななめ）になりて、茶棚より銅（あかがね）の水差を取下して急がわしく水を注（さ）しつ。

「いいえ、違うよ。私のはまた全く芳さんの姉さんとは反対（あちこち）で、あんまり深切にされるから、もう嫌で、嫌で、ならないんだわ。」

少年は太（いた）く怪（あやし）み、

「そんな事っちゃアあるもんでない。何だって優しくされて、それで嫌だというがあるものか。」

「まあさ、お聞きなね。深切だといえば深切だが、どちらかといえば執着（しつこ）いのだわ。かいつまんで話すがね、ちょいと聞賃をあげるから。」

と菓子皿を取出（とりいだ）して、盛りたる羊羹（ようかん）に楊枝（ようじ）を添え、

「一ツおあがり、いまお茶を入替えよう。」

と吸子の茶殻を、こぼしにあけ、

「芳ちゃんだから話すんだよ。誰にも言っちゃ不可(いけな)いよ。実は私の父親(おとっさん)は、中年から少し気が違ったようになって、とうとうそれでおなくなりなすったがね、親のことをいうようだけれど、母様(おっかさん)は少し了簡違(りょうけんちが)いをして、父親(おとっさん)が病気のあいだに、私には叔父さんだ、弟ごと関着(くッつ)いたの。

するとお祖父(じい)さんのお計らいで、私が乳(ち)放れをするとすぐに二人とも追出して、御自分で私を育てて、十三の時までお達者だったが、ああ、十四の春だった。中風(ちゅうぶ)でお悩みなすってから、動くことも出来なくおな

りで、家（うち）は広し、四方は明地（あきち）で、穴のような処に住んでたもんだから、火事なんぞの心配はないのだけれど、盗賊（どろぼう）にでも入られたら、それこそどうすることもならないのよ。お金子（かね）も少々あったそうだし。

雇いの婆さんは居たけれど、耳は遠いし、そんなことの助けにゃならず、祖父（おじい）さんの看病も私一人では覚束（おぼつか）なし、確（たしか）な後見をといった処で、また後見なんていうものは、あとでよく間違が出来るものだから、それよりか、いっそ私に……というので、親類中で相談を極（き）めて、とうとうあてがったのが今の旦那なの。

その頃ちょうど高等中学校を卒業したので、ま、宅（うち）

へ来てから、東京へ出て、大学へ入ろうという相談でね、もともと内の緊りにもなってもらわなきゃあならないというんでさ、わざッと年の違ったのを貰ったもんだから、旦那は二十九で、私は十四。」

お貞は今吸子に湯をばささんとして、鉄瓶に手を懸けたる、片手を指折りて数えみつ。

「十五の違だね。もっとも晩学だとかいうので、大抵なら二十五六で、学士になるのが多いってね。」

「無論さ。」

と少年は傾聴しながら喙を容れたり。

お貞は煎茶を汲出だして、まず少年に与えつつ、

「何だか知らないけれど、御婚礼をした時分は、嬉しくもなく、恐(こわ)くもなく、まるで夢中で、何とも思やしなかったが、実はおじいさんと二人ばかりで、他所(よそ)の人の居ない方が、御膳(ごぜん)を頂く時やなんか、私ゃ気が置けなくて可(よ)かったわ。

変に気が詰まって、他人(ひと)の内へ泊(とまり)にでも行ったようで、窮屈で、つまらなくッて、思ってみればその時分から旦那が嫌いだったかも知れないよ。でも大方甘やかされた癖で、我儘(わがまま)の方が勝ってたのであろうと思う。

そのうちお祖父さんも安心をなすったせいか、大層

気分も好（よ）くなるし、いよいよ旦那が東京へたつというので、祝ってたたしたお酒の座で、ちっと飲（のみ）ようが多かったのがもとになってね、旦那が出発をしたそのおひるすぎに、お祖父様（さん）は果敢（はか）なくおなりなすったのよ。私やもうその時は……」

とお貞は声をうるましたり。

## 五

「それからというものは［＃「いうものは」は底本では「いふものは」］、私はまるで気ぬけがしたようで、内の

中でも一番薄暗い、三畳の室（ま）へ入っちゃあ、どういうものだかね、隅の方へちゃんと坐って、壁の方を向いて、しくしく泣くのが癖になってね、長い間治らなかったの。そうこうするうち児（こ）が出来たわ。

可笑（おかし）いじゃないかねえ。」

お貞は苦々しげに打笑みたり。

「妙なものがころがり出してしまってさ、翌年（あくるとし）の十月のことなのよ。」

と言懸けてお貞はもの案じ顔に見えたりしが、

「そうそう、芳ちゃん、まだその前（さき）にね、旦那がさ、東京へ行って三月めから、毎月々々一枚ずつ、月の

朔日(ついたち)にはきっと写真を写してね、欠かさず私に送って寄来(よこ)すんだよ。まあ、御深切様じゃないかね。そのたんびに手紙がついてて、（いや今月は少し痩(や)せた）の、（今度は少し眼が悪い）の、（どうだ先月と合わしてみい、ちっとあ肥(ふと)って見えよう）なんて、言書(ことばがき)が着いてたわ。

　私ゃお祖父さんのことばかり考えて、別に何にも良人(さき)の事は思わないもんだから、ちょいと見たばかりで、ずんずん葛籠(つづら)の裡(なか)へしまいこんで打棄(うっちゃ)っといたわ。すると、いつのことだッけか、何かの拍子、お友達にめっかってね、

（まあ！　お貞さん、旦那様は飛んだ御深切なお方だねえ。）サ酷く擽ったもんだろうじゃあないかえ。
　それもそのはずだね。写真の裏に一葉々々、お墨附があってよ。年、月、日、西岡時彦写之、お貞殿へさ。
　私もつい口惜紛れに、（写真の儀はお見合せ下されたく、あまりあまり人につけても）ッさ。何があまりあまりだろう、可笑いね。そういってやると、それッきりおやめになったが、十四五枚もあった写真を、また見られちゃあ困ると思ったがね、人にも遣られず、焼くことも出来ずさ、仕方がないから、一纏めにして、

お持仏様の奥ン処へ容(い)れておいてよ。毎日拝んだから可いではないかね。」

先刻(さき)に干したる湯呑の中へ、吸子の茶の濃くなれるを、細く長くうつしこみて、ぐっと一口飲みたるが、あまり苦かりしにや湯をさしたり。

少年はただ黙して聞きぬ。

お貞は口をうるおして、

「児(こ)が出来る、もうそのしくしく泣いてばかりいる癖はなくなッて、小児(こども)にばかり気を取られて、他(ほか)に何にも考えることも、思うこともなくッて、ま、五歳(いつつ)六歳(むッつ)の時は知らず、そのしばらくの間ほど、苦労のなかっ

た時はないよ。

　すると、その夏の初(はじめ)の頃、戸外(おもて)にがらがらと腕車(くるま)が留(とま)って、入って来た男があったの。沓脱(くつぬぎ)に突立(つった)って、案内もしないから、寝かし着けていた坊やを置いて、私が上り口に出て行って、

（誰方(どなた)）といって、ふいと見ると驚いたが、よくよく見ると旦那なのよ。旦那は旦那だが、見違えるほど瘠(や)せていて、ま、それも可いが妙な恰好(かっこう)さ。

　大きな眼鏡のね、黒磨(くろずり)でもって、眉毛から眼へかけて、頬ッぺたが半分隠れようという黒眼鏡を懸けて、希代さね、何のためだろう。それにあのそれ呼吸器と

かいうものを口へ押着けてさ、おまけに鬚を生やしてるじゃあないか。それで高帽子で、羽織がというと、縞の透綾を黒に染返したのに、五三の何か縫着紋で、少し丈不足というのを着て、お召が、阿波縮で、浅葱の唐縮緬の兵児帯を〆めてたわ。

どうだい、芳さん、私も思わず知らず莞爾したよ、これは帰って「＃「帰って」は底本では「帰つて」」来たのが嬉しいのより、いっそその恰好が可笑かったせいなのよ。

病気で帰ったというこッたから、私も心配をして、看病をしたがね、胃病だというので、ちょいとは快く

ならない。一月も二月も、そうさ［＃「そうさ」は底本では「さうさ」］、かれこれ三月ばかりもぶらぶらして、段々瘠せるもんだから、坊やは居るし、私もつい心細くなツて、そっと夜出掛けちゃあお百度を踏んだのよ。するとね、その事が分ったかして、（お貞、そんなに吾(おれ)を治したいか）ツて、私の顔を瞻(みつ)めるからね。何の気なしで、（はい、あなたがよくなって下さいませねば、どうしましょう、私どもは路頭に立たなければなりません。）と真実(ほんとう)の処をいったのよ。

　さあ怒ったの、怒らないのじゃあない。（それでは手前、活計(くらし)のために夫婦になったか。そんな水臭い奴

とは知らなんだ。）と顔の色まで変えるから、私は弱ったの、何のじゃない、どうしようかと思ったわ。」

## 六

「（なぜ一所に死ぬとは言ってくれない。愛情というものは、そんな淡々しいものではない。）ッていうのさ。向うからそう出られちゃあ、こっちで何とも言いようが無いわ。

女郎や芸妓じゃあるまいしさ、そんな殺文句が謂われるものかね。でも、旦那の怒りようがひどいので、

まあ、さんざあやまってさ。坊やがかすがいで、まずそれッきりで治まったがね、私やその時、ああ、執念深い人だと思って、ぞッとして、それからというものは、何だか重荷を背負ったようで、今でも肩身が狭いようなの。

あとでね、あのそら先刻いった黒眼鏡ね、（烏蜻蛉見たように、おかしいじゃアありませんか。）と、病気が治ってから聞いたことがあったよ。そうするとね、東京はからッ風で塵埃が酷いから、眼を悪くせまいための砂除だっていうの、勉強盛なら洋燈をカッカと、ともして寝ない人さえあるんだのに、そう身体ばかり

庇(かば)ってちゃぁ、何にも出来やしないと思ったけれど、まさかそんなことをいえたものでもなし、呼吸器も肺病の薬というので懸けるんだッて。それからね、その髯(ひげ)がまた妙なのさ。」

とお貞は少年の面(かお)を見て、

「衛生髯だとさ、おほほ。分るかえ？　芳さん。」

「何のコッた、衛生髯ッたって分らないよ。」

「それはね。」

となお微笑(ほほえ)みながら、

「こうなのよ。何でも人間の身体(からだ)に附属したものは、爪(つめ)であろうが、垢(あか)であろうが、要らないものは一つも

ないとね、その中でも往来の塵埃（ほこり）なんぞに、肺病の虫がまざって、鼻ンなかへ飛込むのを、髯がね、つまり玄関番見たようなもので、喰留めて入れないンだッさ。見得でも何でもないけれど、身体（からだ）のために生（はや）したと、そういったよ。だから衛生髯だわね。おほほほほ。」

お貞は片手を口にあてつ。少年も噴出（ふきい）だしぬ。

「いくら衛生のためだって、あの髯だけは廃止（よせ）ば可いなあ。まるで（ちょいとこさ）に肖（に）てるものを、髯があるからなおそっくりだ。」

お貞は眉を打顰（うちひそ）めて、

「嫌だよ、芳さんは。（ちょいとこさ）はあんまりだわ。

でも（ちょいとこさ）と言えばこないだ、小橋の上で、あの（ちょいとこさ）の飴屋に逢ったの。ちょうどその時だ。桜に中の字の徽章の着いた学校の生徒が三人連で、向うから行き違って、一件を見ると声を揃えて、（やあ、西岡先生。）と大笑をして行き過ぎたが、何のこった知らんと、当座は気が着かずに居たっけがね。何だとさ、学校じゃあ、皆がもう良人に、（ちょいとこさ）と謂う渾名を附けて、蔭じゃあ、そうとほか言わないそうだよ。」

少年は頭を掉れり。

「何の、蔭でいうくらいなら優しいけれど、髯がね、

あの学校の雇（やとい）になって、はじめて教場へ出た時に、誰だっけか、（先生、先生の御姓名は？）と聞いたんだって。するとね、ちょうど、後（おく）れて溜（たまり）から入って来た、遠藤ツて、そら知ってるだろう。僕の処（とこ）へもよく遊びに来る、肩のあがった、武者修行のような男。」

「ああ、ああ、鉄扇でものをいう人かえ。」

「うむ、彼奴（あいつ）さ、彼奴がさ。髯の傍（そば）へずいと出て、席から名を尋ねた学生に向って、（おい、君、この先生か。この先生ならそうだ、名は《チョイトコサ》だ。）と謂ったので、組（クラス）一統がわッといって笑ツたって、里見がいつか話したっけ。」

お貞は溜いきをもらしたり。

「嫌になっちまう！　じゃ、まるでのっけから安く踏まれて、馬鹿にされ切っていたんだね。」

「でもなかにゃああ見えても、なかなか学問が出来るんだって、そういってる者もあるんだ。何しろ、教場へ出て来ると、礼式もないで、突然、ボウルドに問題を書出して、

（何番、これを。）

といったきり椅子にかかッて、こう、少しうつむいて、肱をついて、黙っているッて。呼ばれた番号の奴は災難だ。大きに下稽古なんかして行かなかろうもの

なら、面くらって、（先生私には出来ません。）といってみても返事をしない。そのままうっちゃっておくもんだから、しまいにゃあ泣声で、（私には出来ません、先生々々。）と呼ぶと、顔も動（うごか）さなけりゃ、見向きもしないで、（遣ってみるです。）というツきりで、取附（とりつく）島も何にもないと。それでも遣ってみても出来そうもない奴は、立ったり、居たり、ボウルドの前へ出ようとして中戻（ちゅうもどり）をしたり、愚図（ぐず）々々迷（まご）ついてる間に、柝（たく）が鳴って、時間が済むと、先生はそのまんまでフイと行ってしまうんだツて。そんな時あ問題を一つ見たばかりで、一時間まる遊び。」

## 七

「だから、西岡は何でも一方に超然として、考えていることがあるんだろう。えらい！　という者もあるよ。」

お貞は「何の。」という顔色(かおつき)。

「考えてるツて、大方内のことばかり考えてて、何をしても手が附かないでいるんだろう。聞いて御覧、芳さんが来てからは、また考えようがいっそきびしいに相違(ちがい)ないから。何だって、またあの位、嫉妬(しっと)深い人も

ないもんだね。

前にも談(はな)した通り、旦那はね、病気で帰省をしてから、それなり大学へは行(ゆ)かないで、ただぶらぶらしていたもんだから、沢山(たんと)ないお金子(かね)も坐食(いぐい)の体(てい)でなくなるし、とうとう先(せん)に居た家(うち)を売って、去々年(おととし)ここの家へ引越したの。

それでもまあ方々から口があって、みんな相当で、悪くもなくって、中でも新潟県だった、師範学校のね芳さん、校長にされたのよ。校長は可(い)いけれど、私は何だか一所に居るのが嫌だから、金沢に残ることにして、旦那ばかり、任地(あっち)へ行くようにという相談をした

が不可（いけ）なくって、とうとう新潟くんだりまで、引張（ひっぱ）り出されたがね。どういうものか、嫌で、嫌で、片時も居たたまらなくッてよ。金沢へ帰りたい帰りたいで、例の持病で、気が滅入（めい）っちゃあ泣いてばかり。

旦那が学校から帰って来ても、出迎（でむかえ）もせず俯向（うつむ）いちゃあ泣いてるもんだから、（ああ、またか。）となさけなそうに言っちゃあ、しおれて書斎へ入って行ったの。別につらあて、、、というンじゃあ決してなかったんだけれど、ほんとうに帰りたかったんだもの。

旦那もとうとう我（が）を折って（それじゃあ帰るが可

い。）というお許しが出ると、直ぐに元気づいて、はきはきして、五日ばかり御膳も頂かれなかったものが、急に下婢（げじょ）を呼んで、（直ぐ腕車夫（くるまや）を見ておいで。）さ、それが夜の十時すぎだから恐しいじゃあないかえ。何だか狂人（きちがい）じみてるねえ。

旦那を残し、坊やはその時分五歳（いつつ）でね、それを連れて金沢（こっち）へ帰ると、さっぱりしてその居心の可（よ）かったっちゃあない。坊もまた大変に喜んだのさ。

それがというと、坊やも乳児（ちのみ）の時から父親（おとっさん）にゃあちっとも馴染（なじ）まないで、少しものごころが着いて来ると、顔を見ちゃ泣出してね。草履を穿（は）いて、ちょこちょ

こ戸外（おもて）へ遊びに出るようになると、情（なさけ）ないじゃあないかえ。家（うち）へ入ろうとしちゃあ、いつでもさ。外戸（おもてど）の隙からそッと透見（すきみ）をして、小さな口で、（母様（かあちゃん）、父様（おとっちゃん）家に居るの？）と聞くんだよ。
（ああ。）と返事をすると、そのまま家へ入らないで、ものの欲（ほし）くなった時分でも、また遊びに行ってしまって、父様居ない、というと、いそいそ入って来ちゃあ、私が針仕事をしている肩へつかまって。」

と声に力を籠（こ）めたりけるが、追愛の情の堪え難かりけむ、ぶるぶると身を震わし、見る見る面の色激して、突然長火鉢の上に蔽（おお）われかかり、真白き雪の腕（かいな）もて、

少年の頸（うなじ）を掻抱（かいいだ）き、

「こんな風に。」

とものぐるわしく、真面目（まじめ）になりたる少年を、惚々（ほれぼれ）と打（うち）まもり、

「私の顔を覗（のぞ）き込んじゃあ、（母様（おっかさん））ッて、（母様）ッて呼んでよ。」

お貞は太（いた）く激しおれり。

「そうしてね、（父様（おとっちゃん）が居ないと可（い）いねえ。）ッて、いつでも、そう言ったわ。」

言懸けてうつむく時、弛（ゆる）き前髪の垂れけるにぞ、うるさげに掻上（かきあ）ぐるとて、ようやく少年にからみたる、

その腕(かいな)を解(ほど)きけるが、なお渠(かれ)が手を握りつつ、
「そんな時ばかりじゃあないの。私が何かくさくさすると、可哀相に児(こども)にあたって、叱咤(ひッちか)ツて、押入へ入れておく。あとで旦那が留守になると、自分でそツと押入から出て来てね、そツと抜足かなんかで、私のそばへ寄って来ちゃあ、肩越に顔を覗(のぞ)いて、(母様(おっかちゃん)、父様が居ないと可いねえ)ッさ。五歳(いつつ)や六歳(むッつ)で死んで行く児(こ)は、ほんとうに賢いのね。女の児(こ)はまた格別情愛があるものだよ。だからもう世の中がつまらなくツて、つまらなくツて、仕様がなかったのを、児(こども)のせいで紛れていたがね、去年(じふてりや)で亡くなってから

は、私ゃもう死んでしまいたくッて堪(たま)らなかったけれど、旦那が馬鹿におとなしくッて、かッと喧嘩することがないものだから、身投げに駈出(かけだ)す機(おり)がなくッて、ついぐずぐずで活(い)きてたが、芳ちゃん、お前に逢ってから、私ゃ死にたくなくなったよ。」

と、じっとその手をしめたるトタンに靴音高く戸を開けたり。

## 八

お貞はいかに驚きしぞ、戸のあくとももろともに器械

のごとく刎(は)ね上りて、夢中に上り口に出迎(いでむか)えつ。蒼(あお)くなりて瞳を据えたる、沓脱(くつぬぎ)の処に立ちたるは、洋服扮装(でたち)の紳士なり。頤(おとがい)細く、顔円(まろ)く、大きさ過ぎたる鼻の下に、賤(いや)しげなる八字髭(はちじひげ)の上唇を蔽(おお)わんばかり、濃く茂れるを貯えたるが、面(かお)との配合を過(あやま)れり。眼(まなこ)はいと小さく、眦(まなじり)垂れて、あるかなきかを怪(あやし)むばかり、殊に眉毛の形乱れて、墨をなすりたるごとくなるに、額には幾条の深く刻める皺(しわ)あれば、実際よりは老けて見ゆべき、年紀(とし)は五十の前後ならむ、その顔に眼鏡を懸け、黒の高帽子を被(かぶ)りたるは、これぞ（ちょいとこさ）という動物にて、うわさせし人の影なりける。

良夫（おっと）と誤り、良夫と見て、胸は早鐘を撞（つ）くごとき、お貞はその良人ならざるに腹立ちけむ、面（おもて）を赤め、瞳を据えて、屹（き）とその面を瞻（みまも）りたる、来客は帽を脱して、恭（うやうや）しく一礼し、左手（ゆんで）に提（ひさ）げたる革鞄（かばん）の中（うち）より、小（ちい）さき旗を取出（とりいだ）して、臆面もなくお貞の前に差出しつ。

「日本大勝利、万歳。」

と謂いたるのみ、顔の筋をも動かさで、（ちょいとこさ）は反身（そりみ）になり、澄し返りて控えたり。

渠がかくのごとくなす時は、二厘三厘思い思いに、その掌（たなそこ）に投げ遣るべき金沢市中の通者（とおりもの）となりおれる僥倖（ぎょうこう）なる漢（おのこ）なりき。

「ちょいとこ、ちょいとこ、ちょいとこさ。」
と渠は、もと異様なる節を附し両手を掉(ふ)りて躍りながら、数年来金沢市内三百余町に飴を売りつつ往来して、十万の人一般に、よくその面を認(みし)られたるが、征清(せいしん)のことありしより、渠は活計(たつき)の趣向を変えつ。すなわち先のごとくにして軒ごとを見舞いあるき、怜悧(れいり)に米塩(べいえん)の料を稼ぐなりけり。

渠は常にものいわず、極めて生真面目(きまじめ)にして、人のその笑えるをだに見しものもあらざれども、式(かた)のごとき白痴者なれば、侮慢(ぶまん)は常に嘲笑(ちょうしょう)となる、世に最も賤(いやし)まるる者は時としては滑稽(こっけい)の材となりて、金沢の

人士（ひと）は一分時の笑（わらい）の代（しろ）にとて、渠に二三厘を払うなり。

お貞はようやく胸を撫（な）でて、冷（ひやや）かに旧（もと）の座に直りつ。代価は見てのお戻りなる、この滑稽劇を見物しながら、いまだ木戸銭を払わざるにぞ、（ちょいとこさ）は身動きだもせで、そのままそこに突立（つった）ちおれり。

ややありてお貞は心着きけむ、長火鉢の引出（ひきだし）を明けて、渠に与うべき小銭を探すに、少年は傍（かたわら）より、

「姉さん、湯銭のつりがあるよ、おい。」

と板敷に投出せば、（ちょいとこさ）は手に取りて、高帽子を冠（かぶ）ると斉（ひと）しく、威儀を正して出行（いでゆ）きたり。

# 九

出行く（ちょいとこさ）を見送りて、二人は思わず眼を合しつ。

「なるほど消(に)ているねえ。」

とお貞は推出(おしだ)すがごとくに言う。少年はそれには関せず。

「まあ、それからどうしたの？」

渠は聞くことに実の入(い)りけむ、語る人を促(うなが)せり。

「さあその新潟から帰った当座は、坊やも——名は環(たまき)といったよ——環も元気づいて、いそいそして、嬉

しそうだし、私も日本晴がしたような心持で、病気も何にもあったもんじゃあないわ。野へ行く、山へ行くで、方々外出をしてね、大層気が浮いて可い心持。

出来るもんならいつまでも旦那が居ないで、環と二人ッきり暮したかったわ。

だがねえ、芳さん、浮世はままにならないものとは詮じ詰めたことを言ったんだね。二三度旦那から手紙を寄越して、（奉公人ばかりじゃ、緊が出来ない、病気が快くなったら直ぐ来てくれ。）と頼むようにいって来ても、何の、彼のッて、行かないもんだから、お聞きよ、まあ、どうだろうね。行ってから三月も経た

ない内に、辞職をして帰って来て、（なるほどお前なんざ、とても住めない、新潟は水が悪い）ッさ。まあ！　するとまた環がね、どういうものか、はきはきしない、嫌にいじけッちまって、悪く人の顔色を見て、私の十四五の時見たように、隅の方へ引込んじゃあ、うじうじするから、私もつい気が滅入って、癇癪が起るたんびに、罪もないものを……」

と涙を浮め、お貞はがッくり俯向きたり。

「その癖、旦那は、環々ッて、まあ、どんなに可愛がったろう。頭へ手なんざ思いも寄らない、睨める真似をしたこともなかったのに、かえって私の方が癇癪を起

しちゃ、（母様《おっかちゃん》）と傍《そば》へ来るのを、（ええ、も、うるさいねえ、）といって突飛ばしてやると、旦那が、（咎《とが》もないものをなぜそんなことをする）てッて、私を叱るとね、（母様を叱っては嫌よ、御免なさい御免なさい）と庇《かば》ってくれるの。そうして、（あんな母様《おっかさん》は不可《いけない》のう、ここへ来い）と旦那が手でも引こうもんなら、それこそ大変、わッといって泣出したの。（あ、あ、）と旦那が大息をして、ふいと戸外《おもて》へ出てしまうと、後で、そっと私の顔を見ちゃあ、さもさもどうも懐しそうに、莞爾《にっこり》と笑う。そのまた愛くるしさッちゃあない。私も思わず莞爾して、引ッたくるように

膝へのせて、しっかり抱(だき)しめて頬をおッつけると、嬉しそうに笑ッちゃあ、(父様(おとっちゃん)が居ないと可い)と、それまたお株を言うじゃあないかえ。

だもんだから、つい私もね、何だか旦那が嫌になったわ。でも或時(いつか)、

(お貞、吾(おれ)も環にゃ血を分けたもんだがなあ。)とさも情(なさけ)なそうに言ったのには、私も堪(たま)らなく気の毒だったよ。

前世の敵(かたき)同士ででもあったものか、芳さん、環がじふてりやでなくなる時も、私がやる水は、かぶりつくようにして飲みながら、旦那が薬を飲ませようとする

と、ついと横を向いて、頭（かぶり）を掉（ふ）って、私にしがみついて、懐へ顔をかくして、いやいやをしたもんだから、ついぞ荒い言（こと）をいったこともない旦那が、何と思ったか血相を変えて、

（不孝者！）といって、握拳（にぎりこぶし）で突然（いきなり）環をぶとうとしたから、私も屹（きっ）となって、片膝立てて、

（何をするんです！）と摺寄（すりよ）ったわ。その時の形相の凄（すさま）じさは、ま、どの位であったろうと、自分でも思い遣られるよ。言憎（いいにく）いことだけれど、真実（ほんとう）にもう旦那を喰殺してやりたかったわね。今でも旦那を環の敵（かたき）だと思うもの。あの父親さえ居なけりゃ、何だって環が

死ぬものかね、死にゃあしないわ、私ばかりの児（こ）だったら。」

お貞はしばらく黙したりき。ややあり思出したらんかのごとく、

「旦那はそのまま崩折（くずお）れて、男泣きに泣いたわね。私ゃもう泣くことも忘れたようだった。ええ、芳さん、環がなくなってから、また二三度も方々へいい役に着いたけれども、金沢なら可いが、みんな遠所（とおく）なので、私はどういうものか遠所へ行くとしきりに金沢が恋しくなッて、帰りたい帰りたい一心でね、済まないことだとは思ってみても、我慢がし切れないのを、無

理に堪（こた）えると、持病が起って、わけもないことに泣きたくなったり、飛んだことに腹が立ったりして、まるで夢中になるもんだから、仕方なしに帰って来ると、旦那も後からまた帰る、何でも私をば一人で手放しておく訳にゃゆかないと見えて、始終一所に居たがるわ。だもんだからどこも良（い）い処には行かれないで、金沢じゃ、あんなつまらない学校へ、腰弁当というしがない役よ。」

と一人冷かに笑うたり。

## 十

「何もそんなに気を揉まなくッても、よさそうなものを。旦那はね、まるで留守のことが気に懸るために出世が出来ないのだ、といっても可いわ。

　そんなに私を思ってくれるもんだから、夜遊はせず、ほんのこッたよ、夫婦になってから以来、一晩も宅を明けたことなしさ。学校がひければ、ちゃんともう、道寄もしないで帰って来る。もっとも無口の人だから、口じゃ何ともいわないけれど、いつもむずかしい顔を見せたことはなし、地体がくすぶった何しろ、（ちょいとこさ）というのだもの。それだが、眼が小さいから

ちったああれでも愛嬌があるよ。荒い口をきいたことなし、すりゃ私だって、嫌だ、嫌だとはいうものの、どこがといっちゃあ返事が出来ない。けれども嫌だから仕様がないわ。

　それだから私も、なに言うことに逆らわず、良人はやっぱり良人だから、嫌だっても良人だから、良人のように謹んで事えているもの。そう疑ぐるには及ばないじゃあないかね。芳さん、芳さんの姉様がひどくされたようでも困るけれど、男はちったあ男らしく、たまには出歩行でもしないとね、男に意気地がないようで、女房の方でも頼母しくなくなるのよ。

それを旦那と来た日にゃあ、ちょいとの間でも家（うち）に居て、私の番をしていたがるんだわ。それも私が行届かないせいだろうと、気を着けちゃあいるし、それにもう私は旦那の犠牲（いけにえ）だとあきらめてる。分らないながらも女の道なんてことも聞いてるから、浮気らしい真似もしないけれど、芳さん、あの人の弱点（よわみ）だね。それがために出世も出来ないなんといった日にゃ、私ゃいっそ可哀相だよ。あわれだよ。

何の密夫（まおとこ）の七人ぐらい、疾（とっ）くに出来ないじゃあなかったが……」

といいかけしがお貞はみずからその言過しを恥じた

る色あり。

「これは話さ。」

と口軽に言消して、

「何も見張っていたからって、しようのあるもんじゃあないわね。」

お貞は面晴々しく、しおれし姿きりりとなりて、その音調も気競いたり。

「しかしね、芳さん、世の中は何という無理なものだろう。ただ式三献をしたばかりで、夫だの、妻だのッて、妙なものが出来上ってさ。女の身体はまるで男のものになって、何をいわれてもはいはいはいッて、従わな

いと、イヤ、不貞腐（ふてくされ）だの、女の道を知らないのと、世間でいろんなことをいうよ。

折角お祖父さんが御丹精で、人並に育ったものを、ただで我ものにしてしまって、誰も難有（ありがた）がりもしないじゃないか。

それでいて婦人（おんな）はいつも下手（したで）に就いて、無理も御道理（ごもっとも）にして通さねばならないという、そんな勘定に合わないことツちゃあ、あるもんじゃない。どこかへ行こうといったって、良人がならないといえば、はい、起（た）てといえば、はい、寝ろといわれりゃそれも、はい、だわ。

人間一人(にん)を縦にしようが、横にしようが、自分の好(すき)なまにしておきながら、まだ不足で、たとえば芳さんと談話(はなし)をすることはならぬといわれりゃ、やっぱり快く落着いて談話も出来ないだろうじゃないかね。一体操を守れだの、良人に従えだのという、捉(おきて)かなんか知らないが、そういったようなことを極(き)めたのは、誰だと、まあ、お思いだえ。

一遍婚礼をすりゃ疵者(きずもの)だの、離縁(さられ)るのは女の恥だのッて、人の身体(からだ)を自由にさせないで、死ぬよりつらい思いをしても、一生嫌な者の傍(そば)についてなくッちゃあならないというのは、どういう理窟だろう、わから

ないじゃないかね。

　まさか神様や、仏様のおつげがあったという訳でもあるまいがね。もともと人間がそういうことを拵(こしら)えたのなら、誰だって同一(おんなじ)人間だもの、何密夫(まおとこ)をしても可い、駈落(かけおち)をしても可いと、言出した処で、それが通って、世間がみんなそうなれば、かえって貞女だの、節婦だの、というものが、爪(つま)はじきをされようも知れないわ。

　旦那は、また、何の徳があって、私を自由にするんだろう。すっかり自分のものにしてしまって、私の身体(からだ)を縛ったろうね。食べさしておくせいだといえば、

私ゃ一人で針仕事をしても、くらしかねることもないわ。ねえ、芳さん、芳さんてばさ。」

少年は太(いた)くこの答に窮して、一言もなく聞きたりけり。

## 十一

お貞はなおも語勢強く、

「ほんとに虫のいい談話(はなし)じゃないかね、それとも私の方から、良人になッて下さいって、頼んで良人にしたものなら、そりゃどんなことでも我慢が出来るし、ちっ

とも不足のあるもんじゃあないが、私と旦那なんざ、え、芳さん、夫にした妻ではなくッて、妻にした良人だものを。何も私が小さくなッて、いうことを肯（き）いて縮んでいる義理もなし、操を立てるにも及ばないじゃあないか。

芳さんとだってそうだわ。何もなかをよくしたからとッて、不思議なことはないじゃあないかね。こないだ騒ぎが持上って、芳さんがソレ駈出（かけだ）した、あの時でも、旦那がいろいろむずかしくいうからね、（はい、芳さんとは姉弟分（きょうだいぶん）になりました。どういう縁だか知らないけれど、私が銀杏返（いちょうがえし）に結っていますと、亡なった

姉様（ねえさん）に肖（に）てるツて、あの児も大層姉おもいだと見えまして、姉様々々ツて慕ってくれますもんですから、私もつい可愛くなります。）と無理だとは言われないつもりで言ったけれど、（他人で、姉弟というがあるものか）ツて、真底から了簡（りょうけん）しないの。傍（そば）に居た伯父さんも、伯母さんも、やっぱりおんなじようなことを言って、（ふむ、そんなことで世の中が通るものか。言ようもあろうのに、ナニ姉弟分だ。）とこうさ。口惜（くや）しいじゃあないかねえ。芳さん、たとい芳さんを抱いて寝たからたツて、二人さえ潔白なら、それで可いじゃあないか、旦那が何と言ったって、私やちっとも構やし

ないわ。」

お貞はかく謂えりしまで、血色勝れて、元気よく、いと心強く見えたりしが、急に語調の打沈みて、

「しかしこうはいうものの、芳さん世の中というものがね、それじゃあ合点（がってん）しないとさ。たとい芳さんと私とが、どんなに潔白であッたからっても、世間じゃそうとは思ってくれず、（へん、腹合せの姉弟だ。）と一万石に極（きめ）っちまう！　旦那が悪いというでもなく、私と芳さんが悪いのでもなく、ただ悪いのは世間だよ。

どんなに二人が潔白で、心は雪のように清くッてもね、泥足で踏みにじって、世間で汚くしてしまうんだ

わ。

　雪といえば御覧な、冬になって雪が降ると、ここの家（うち）なんざ、裏の地面が畠（はたけ）だからね、木戸があかなくッて困るんだよ。理窟を言えば同一（おんなじ）で、垣根にあるだけの雪ならば、無理に推せば開（あ）くけれど、ずッとむこうの畠から一面に降りつづいて、その力が同一（ひとつ）になって、表からおすのだもの。どうして、何といわれても、世間にゃあ口が開（あ）かないのよ。

　男の腕なら知らないこと、女なんざそれを無理にこじあけようとすると、呼吸切（いきぎれ）がしてしまうの。でも芳さんは士官になるというから、今に大将にでもおなり

の時は、その力でいくらも世間を負かしてしまって、何にも言わさないように出来もしようけれど、今といっちゃあたッた二人で、どうすることもならないのよ。

　それとも神様や仏様が、私だちの手伝をして、力を添えて下さりゃ可いけれど、そんな願(ねがい)はかなわないわね。

　婆々(ばばあ)じみるッて芳さんはお笑いだが、芳さんなぞはその思遣(おもいやり)があるまいけれど、可愛(かわゆ)い児でも亡くして御覧、そりゃおのずと後生(ごしょう)のことも思われるよ。

　あれは、えらい僧正だって、旦那の勧める説教を聞

きはじめてから、方々へ参詣(まい)ったり、教(おしえ)を聞いたりするんだがね。なるほどと思うことばかり、それでも世の中に逆らッて、それで、御利益があるッてことは、ちっとも聞かしちゃあくれないものを。
戸を推(お)ッつけてる雪のような、力の強い世の中に逆らって行(ゆ)こうとすると、そりゃ弱い方が殺されッちまうわ。そうすりゃもう死ぬより他(ほか)はないじゃないかね。
私ももうもう死んでしまいたいと思うけれど、それがまたそうも行(ゆ)かないものだし、このごろじゃ芳さんという可愛いものが出来たからね、私や死ぬことは嫌になったわ。ほんとうさ！　自分の児が可愛いとか、

芳さんとこうやって談話（はなし）をするのが嬉しいとか、何でも楽（たのし）みなことさえありゃ、たとい辛くッても、我慢が出来るよ。どうせ、私は意気地なしで、世間に負けているからね、そりゃ旦那は大事にもする、病気（やまい）が出るほど嫌な人でも、世間（よのなか）にゃ勝たれないから、たとい旦那が思い切って、縁を切ろうといってもね、どんな腹いせでも旦那にさせて、私ゃ、あやまって出て行（ゆ）かない。」

と歯をくいしめてすすり泣きつ。

## 十二

お貞は幾年来独り思い、独り悩みて、鬱積せる胸中の煩悶の、その一片をだにかつて洩せしことあらざりしを、いま打明くることとなれば、順序も、次第も前後して、乱れ且つ整わざるにも心着かで、再び語り続けたり。

「いっちゃ女の愚痴だがね。私はさっきいったように、世の中というものがあって、自分ばかりじゃないからと、断念めて、旦那に事えてはいるけれど、一日に幾度となく、もうふツふツ嫌になることがあるわ。芳さんも知っておいでだ。ついこないだのことだっ

け、晩方旦那の友達が来たので、私もその日は朝ツから、塩梅(あんばい)が悪くツて、奥の室(ま)に寝ていた処へ、推懸(おしか)けたもんだから、外に別に部屋はなし、ここへ出て坐っていたの。

お客がまた私の大嫌(だいきらい)な人で、旦那とは合口(あいくち)だもんだから、愉快(おもしろ)そうに［＃「愉快(おもしろ)そうに」は底本では「愉快(おもしろ)さうに」］話してたツけが、私は頭痛がしていた処へ、その声を聞くとなお塩梅が悪くなって、胸は痛む、横腹(よこッぱら)は筋張るね、おいおい薄暗くはなって来る。暑いというので燈火(あかり)はつけずさ。陰気になって、いろんなことを考え出して、つい堪(たま)らなくなったから、横に

なろうと思っても、直ぐ背後（うしろ）に居るんだもの、立膝（たてひざ）も出来ないから、台所へ行って板の間にでもと思ったが、あすこにゃ蚊（か）が酷（ひど）いし、仕方がないから戸外（おもて）へ出て、軒下にしゃがんで泣いてた処へ、ちょうどお前さんが来ておくれで、二階へ来いとおいいだから、そっと上ると、まあ、おとしよりが御深切に、胸を押して下すったので、私ゃもう難有（ありがた）くッて、嬉しくッて、心じゃ手を合せて拝んだわ。

　おかげでやっと胸が開きそうになって、ほっと呼吸（いき）をついた処へ、

（貞はそこに参っておりましょうな。）と、壇階子（だんばしご）の下

へ来て、わざわざ旦那が呼んだじゃあないかね。

私ゃあんまりくさくさしたから、返事もしないで黙っていると、おばあさんがお聞きつけなすッて、

（階下（した）へおいで、ね、ね、そうしないと悪い）ッて、みんなもうちゃんと推量して、やさしく言って下さるんだもの。

（ここに居とうございます！）と、おばあ様（さん）の膝に縋（すが）りついたの。

下ではなお呼ぶもんだから、おばあさんが私のかわりに返事をなすって、

（可いから、可いから。）と、低声（こごえ）でおっしゃってね、

背(せなか)を撫でて下さるもんだから、仕方なしに下りて行くと、お客はもう帰っていてね、嫌な眼で睨(にら)まれたよ。空いてる室(ま)がないもんだから、そういう時には困っちまう。アレ悪く取っちゃあ困るわね。

何も芳さんに二階を貸しておいて、こういっちゃあわるいけれど、はじめッからこの家(うち)は嫌いなの。水は悪いし、流元(ながしもと)なんざ湿地で、いつでもじくじくして、心持が悪いっちゃあない。雪どけの時分(ころ)になると、庭が一杯水になるわ。それから春から夏へかけては李(すもも)の樹が、毛虫で一杯。

それに宅中(うちじゅう)陰気でね、明けておくと往来から奥の

室（ま）まで見透（みとお）しだし、ここいら場末だもんだから、いや、あすこの宅はどうしたの、こうしたのと、近所中で眼を着けて、晩のお菜まで知ってるじゃあないかね。大嫌な猫がまた五六疋、野良猫が多いので、のそのそ入って、ずうずうしく上り込んで、追ってもにげるような優しいんじゃない。

　隣の小猫はまた小猫で、それ井戸は隣と二軒で使うもんだから、あすこの隔（へだて）から入って来ちゃあ、畳でも、板の間でも、ニャアニャア鳴いて歩行（ある）くわ。

　隣の猫のこッたから、あのまた女房（おかみ）が大抵じゃないのだからね、（家（うち）の猫を）なんて言われるが嫌さに、打（ぶ）

つわけにはもとよりゆかず、二三度干物でも遣ったものなら、可いことにして、まつわって、からむも可いけれど、芳さん、ありゃ猫の疱瘡とでもいうのかしら。からだじゅう一杯のできもので、一々膿をもって、まるで、毛が抜けて、肉があらわれてね、汚なくって手もつけられないよ。それがさ、昨夜も蚊帳の中へ入込んで、寝ていた足をなめたのよ。何の因果だか、もうもう猫にまで取着かれる。」

と投ぐるがごとく言いすてつ。苦笑して呟きたり。

「ほんとうに泣より笑だねえ。」

# 十三

お貞の言途絶えたる時、先刻より一言も、ものいわで渠が物語を味いつつ、是非の分別にさまよえりしごとき芳之助の、何思いけん呵々と笑い出して、

「ははは、姉様は陰弁慶だ。」

お貞は意外なる顔色にて、

「芳さん、何が陰弁慶だね。」

「だってそんなに決心をしていながら、一体僕の分らないというのはね、人ががらりと戸を明けると、眼に着くほどびっくりして、どきり！　する様子が確に

見えるのは、どういうものだろう。髯（ひげ）の留守に僕と談話（はなし）でもしている処へ唐突（だしぬけ）に戸外（おもて）があけば、いま姉様がいった世間（よのなか）の何とかで、吃驚（びっくり）しないにも限らないが、こうしてみるに、なにもその時にゃ限らないようだ。いつでもそうだから可笑（おかし）いじゃないか。それに姉様のは口でいうと反対で、髯の前じゃおどおどして、何だか無暗（むやみ）に小さくなって、一言ものをいわれても、はッと呼吸（いき）のつまるように、おびえ切っている癖に。今僕に話すようじゃ、酸いも、甘いも、知っていて、旦那を三銭（さんもん）とも思ってやしない。僕が二厘の湯銭の剰銭（つり）で、（ちょいとこさ）を追返したよりは、なお酷（ひど）く安くして

るんだ。その癖、世間じゃ、（西村の奥様は感心だ。今時の人のようでない。まるで嫁にきたてのように、旦那様を大事にする。婦人（おんな）はああ行（ゆ）かなければ嘘だ。貞女の鑑（かがみ）だ。しかし西村には惜（おし）いものだ。）なんとそう言ってるぞ。そうすりゃ世間も恐しくはなかろうに、何だって、あんなにびくびくするのかなあ。だから姉様は陰弁慶だ。」

　と罪もなくけなしたるを、お貞は聞きつつ微笑（ほほえ）みたりしが、ふと立ちて店に出（い）で行（ゆ）き、往来の左右を視（なが）め、旧（もと）の座に帰りて四辺（あたり）を眴（みまわ）し、また板敷に伸上りて、裏庭より勝手などを、巨細（こさい）に見て座に就きつ。

「それはね、芳さん、こうなのよ。」
という声もハヤふるえたり。
「芳さんだと思って話すのだから、そう思ッて聞いておくれ。
私はね、可いかい。そのつもりで聞いておくれ。私はね、いつごろからという確（たしか）なことは知らないけれど、いろんな事が重（かさな）り重りしてね、旦那が、旦那が、どうにかして。
死んでくれりゃいい。死んでくれりゃいい。死ねばいい。死ねばいい。
とそう思うようになったんだよ。ああ、罪の深い、

呪詛（のろ）うのも同一（おんなじ）だ。親の敵（かたき）でもあることか、人並より私を思ってくれるものを、（死んでくれりゃいい）と思うのは、どうした心得違いだろうと、自分で自分を叱ってみても、やっぱりどうしてもそう思うの。

その念（おもい）が段々嵩（こう）じて、朝から晩まで、寝てからも同一（おんなじ）ことを考えてて、どうしてもその了簡（りょうけん）がなおらないで、後暗いことはないけれど、何（なん）に着け、彼（か）に着け、ちょっとの間もその念（おもい）が離れやしない。始終そればかりが気にかかって、何をしても手に着かないしね、じっと考えこんでいる時なんざ、なおのこと、何にも思わないでその事ばかり。ああ、人の妻の身で、

何たる恐しい了簡だろうと、心の鬼に責められちゃあ、片時も気がやすまらないで、始終胸がどきどきする。それがというと、私の胸にあることを、人に見付かりやしまいかと、そう思うから恐怖（こわい）んだよ。

わけても、旦那に顔を見られるたびに、あの眼が、何だか腹の中まで見透（みすか）すようで、おどおどしずにゃいられない。（貞）ッて一声呼ばれると、直ぐその、あとの句が、（お前、吾（おれ）の死ぬのが待遠いだろう。）とこう来るだろうと思うから、はッとしないじゃいられないわね。それで何ぞ外のことを言われると、ほッと気が休まって、その嬉しさっちゃないもんだから、用でも、

何でも、いそいそする。

それにこうやって、ここへ坐って、一人でものを考えてる時は、頭の中で、ぐるぐるぐるぐる、（死ねば可い）という、鬼か、蛇(じゃ)か、何ともいわれない可恐(こわい)ものが、私の眼にも見えるように、眼前(めさき)に駈(かけ)まわっているもんだから、自分ながら恐しくッて、観音様を念じているの。そこへがらりと戸を開けられちゃあ、どうして慌てずにいられよう。（ああ、めッかった。）と、もう死んだ気になっちまう！

それが心配で、心配で、どうぞして忘れたいと思うから、けもないことにわあわあ騒いだり、笑ったり、

他所（よそ）めには、さも面白そうに見えようけれど、自分じゃ泣きたいよ。あとではなおさら気がめいッて、ただしょんぼりと考え込むと、また、いつもの（死ねばいい）が見えるようなの。

恐しくッてたまらないから、どうぞこの念がなくなりますようにと、観音様に願っても、罪が深いせいなのか、段々強くなるばかり。

気のせいか知らないけれど、旦那は日に日に血色が悪くなって、次第に弱って行く様子、こりゃ思いが届くのかと考えると、私ゃもう居ても起（た）っても堪（たま）らない。

だから旦那が煩いでもすると、ハッと思って、こりゃ

どうでも治さないと、私が呪詛(のろい)殺すのだと、もうもうさほどでもない病気でも、夜(よ)の目も寝ないで介抱するが、お医者様のお薬でも、私の手から飲ませると、かえって毒になるようで、何でも半日ばかりの間は、今にも薬の毒がまわって、血でも吐きやしないかしらと、どうしてその間の心配というものは！　でもそれでもやっぱり考えることといったら、ちっとも違(ちがい)はない、（死ねば可い。）で、早くなおって欲しいのは、実は（死ねば可い。）と思うからだよ。

　ねえ、芳さん分ったろう。もう胸が一杯で、口も利かれやしないから、後生だ、推量しておくれ。も、私や、

私はもう芳さんどうしたら可いんだねえ。」

と身を震わしたるいじらしさ！

お貞がこの衷情（ちゅうじょう）に、少年は太（いた）く動かされつ。思わず暗涙（なみだ）を催したり。

「ああ姉様は可哀そうだねえ。僕が、僕が、僕が、どうかしてあげようから、姉さん死んじゃあ不可（いけな）いよ。」

お貞は聞きて嬉しげに少年の手をじっと取りて、

「嬉しいねえ。何の自害なんかするもんかね、世間と、旦那として私をこんなにいじめるもの。いじめ殺されて負けちゃ卑怯（ひきょう）よ。意気地が無いわ。可いよ、そんな心配は要らないよ。私ゃ面（つら）あてにでも、活（い）きている。

たといこの上幾十倍のつらい悲しいことがあっても、きっと堪（こら）えて死にゃあしないわ。と心強くはいってみても、死なれないのが因果なのだねえ。」

ほろりとして見る少年の眼にも涙を湛（たた）えたり。時に二階より老女の声。

「芳や、帰ったの。」

「あれ、おばあさんが。」

「はい、唯今（ただいま）。」

## 十四

二段ばかり少年は壇階子（だんばしご）を昇り懸けて、と顧みて驚きぬ。時彦は帰宅して、はや上口（あがりぐち）の処に立てり。

我が座を立ちしと同時ならむ。と思うも見るもまたたくま、さそくの機転、下を覗（のぞ）きて、

「もう、奥様（おくさん）、何時（なんどき）です。」

「は。」

とお貞は起（た）ちたるが、不意に顚倒（てんどう）して、起ちつ、居つ。うろうろ四辺（あたり）を見廻す間（ひま）に、時彦は土間に立ちたるまま、粛然として帯の間より、懐中時計を取出（とりいだ）し、丁寧に打視（うちなが）めて、少年を仰ぎ見んともせず、

「五十九分前六時です。」

「憚様（はばかりさま）。」
と少年は跫音（あしおと）高く二階に上れり。
時彦は時計を納めつ。立ちも上らず、坐りも果てざる、妻に向（むか）いて、沈める音調、
「貞、床を取ってくれ、気分が悪いじゃ。貞、床をとってくれ、気分が悪いじゃ。」
面（おもて）は死灰のごとくなりき。

## 十五

時彦はその時よりまた起（た）たず、肺結核の患者は夏を

過ぎて病勢募り、秋の末つ方に到りては、恢復(かいふく)の望(のぞみ)絶果てぬ。その間お貞が尽したる看護の深切は、実際隣人を動かすに足るものなりき。

渠(かれ)は良人の容体の危篤に陥りしより、ほとんど一月ばかりの間帯を解きて寝しことあらず、分けてこのごろに到りては、一七日(いちしちにち)いまだかつて瞼(まぶた)を合さず、渠は茶を断ちて神に祈れり。塩を断ちて仏に請えり。しかれども時彦を嫌悪の極、その死の速(すみや)かならんことを欲する念は、良人に薬を勧むる時も、その疼痛(とうつう)の局部を擦(さす)る隙(ひま)も、須臾(しゅゆ)も念頭を去りやらず。甚しいかなその念の深く刻めるや、おのが幾年の寿命を縮め、身を

もて神仏の贄(にえ)に供えて、合掌し、瞑目(めいもく)して、良人の本復を祈る時も、その死を欲するの念は依然として信仰の霊を妨げたり。

良人の衰弱は日に著(しる)けきに、こは皆おのが一念よりぞと、深更四隣静まりて、天地沈々、病者のために洋燈(ランプ)を廃して行燈(あんどん)にかえたる影暗く、隙間(すきま)もる風もあらざるにぞ、そよとも動かぬ灯影(ほかげ)にすかして、その寂(じゃく)たること死せるがごとき、病者の面をそと視(なが)めて、お貞は顔を背けつつ、頤(おとがい)深く襟に埋(うず)めば、時彦の死を欲する念、ここぞと熾(さかん)に燃立ちて、ほとんど我を制するあたわず。そがなすままに委(まか)しおけば、奇異なる幻

影眼前（めさき）にちらつき、※（ぱっ）［＃「火＋發」、153-7］と火花の散るごとく、良人の膚（はだ）を犯すごとに、太く絶え、細く続き、長く幽（かす）けき呻吟声（うめきごえ）の、お貞の耳を貫くにぞ、あれよあれよとばかりに自ら恐れ、自ら悼（いた）み、且つ泣き、且つ怒（いか）り、且つ悔いて、ほとんどその身を忘るる時、

「お貞。」

と一声（ひとこえ）、時彦は、鬱（うつ）し沈める音調もて、枕も上げで名を呼びぬ。

この一声を聞くとともに、一桶（ひとおけ）の氷を浴びたるごとく、全身の血は冷却して、お貞は、

「はい。」

と戦(おのの)きたり。

時彦はいともの静(しずか)に、

「お前、このごろから茶を断ッたな。」

「いえ、何も貴下(あなた)、そんなことを。」

と幽かにいいて胸を圧(おさ)えぬ。

時彦は頤(おとがい)のあたりまで、夜着の襟深く、仰向(あおむけ)に枕して、眼細(まぼそ)く天井を仰ぎながら、

「塩断(しおだち)もしてるようだ。一昨日(おととい)あたりから飯も食べないが、一体どういう了簡(りょうけん)じゃ。」

（貴下を直したいために）といわんは、渠の良心の許さざりけむ、差俯向(さしうつむ)きてお貞は黙しぬ。

「あかりが暗い、搔立てるが可い。お前が酷く瘠せッこけて、そうしょんぼりとしてる処は、どう見ても幽霊のようじゃ、行燈が暗いせいだろう。な。」

「はい。」

お貞は、深夜幽霊の名を聞きて、ちりけもとより寒さを感じつ。身震いしながら、少しく居寄りて、燈心の火を搔立てたり。

「そんなに身体を弱らせてどうしようという了簡なんか。うむ、お貞。」

根深く問うに包みおおせず、お貞はいとも小さき声にて、

「よく御存じでございます。」

「むむ、お前のすることは一々吾(おり)や知っとるぞ。」

「え。」

とお貞はずり退(さが)りぬ。

「茶断(ちゃだち)、塩断(しおだち)までしてくれるのに、吾(おれ)はなぜ早く死なんのかな。」

お貞は聞きて興覚顔(きょうざめがお)なり。

時彦の語気は落着けり。

「疾(はや)く死ねば可いと思うておって、なぜそんな真似をするんだな。」

と声に笑いを含めて謂(い)えり。お貞はほとんど狂せん

とせり。
病者はなおも和(やわら)かに、
「何、そう驚くにゃ及ばない。昨日今日にはじまったことではないが、お貞、お前は思ったより遥(はるか)に恐しい女だな。あれは憎い、憎い奴だから殺したいということなら、吾(おれ)も了簡のしようがあるが、（死んでくれりゃ可い。）は実に残酷だ。人を殺せば自分も死なねばならぬというまず世の中に定規(さだめ)があるから、我身(わがみ)を投出して、つまり自分が死んでかかって、そうしてその憎い奴を殺すのじゃ。誰一人生命(いのち)を惜(おし)まぬものはない、活きていたいというのが人間第一の目的じゃから、そ

の生命（いのち）を打棄ててかかるものは、もう望（のぞみ）を絶ったもので、こりゃ、隣（あわれ）むべきものである。

お前のはそうじゃあない。（死んでくれりゃ可い）と思うので、つまり精神的に人を殺して、何の報（むくい）も受けないで、白日青天、嫌な者が自分の思いで死んでしまった後（あと）は、それこそ自由自在の身じゃでの、仕たい三昧（ざんまい）、一人で勝手に栄耀（えよう）をして、世を愉快（おもしろ）く送ろうとか、好（すき）な芳之助と好（い）いことをしようとか、怪（け）しからんことを思うている、つまり希望というものがお前にあるのだ。

人の死ぬのを祈りながら、あとあとの楽（たのし）みを思う

ている、そんな太い奴があるもんか。

吾(おれ)はきっと許さんぞ。

そうそう好(すき)なまねをお前にされて、吾も男だ、指を啣(くわ)えて死にはしない。

といつも思っていたんだが、もうこの肺病には勝たれない、いや、つまり、お前に負けたのだ。

してみれば、お貞、お前が呪詛(のろい)殺すんだと、吾がそう思っても、仕方があるまい。

吾はどのみち助からないと、初手ッから断念(あきら)めてるが、お貞、お前の望が叶(かの)うて、後で天下晴(ばれ)に楽(たのし)まれるのは、吾はどうしても断念められない。

謂うと何だか、女々しいようだが、報のない罪をし遂げて、あとで楽（たのしみ）をしようという、虫の可いことは決して無い。またそうさせるような吾でもない。

お貞、謝罪（わび）をしちゃあ可（い）かんぞ。お前は何も謝罪をすることもなし、吾も別に謝罪を聞く必要も認めんじゃ。悪かったというて謝罪をすればそれで済む、謝罪を聞けば了簡すると、そんな気楽なことを思うと、吾のいうことが分るまいでな。何でもしたことには、それ相当の報酬（むくい）というものが、多くもなく、少なくもなく、ちょうど可いほどあるものだと、そう思ってろ！可いか、お貞、……お貞。」

と少し急(せ)き込みて、絶え入るばかりに咽(むせ)びつつ、しばらく苦痛を忍びしが、がらがらと血を吐きたり。

いつもかかることのある際には、一刀(ひとかたな)浴びたるごとく、蒼(あお)くなりて縋(すが)り寄りし、お貞は身動(みうごき)だもなし得ざりき。

病者は自ら胸を抱(いだ)きて、眼(まなこ)を瞑(ねむ)ること良久(ひさ)しかりし、一際(ひときわ)声の嗄(から)びつつ、

「こう謂えばな、親を蹴殺(けころ)した罪人でも、一応は言訳をすることが出来るものをと、お前は無念に思うであろうが、法廷で論ずる罪は、囚徒が責任を負ってるのだ。

今お前が言訳をして、今日からどんな優しい気になろうとも、とても助からない吾に取っては、何の利益も無いことで、死んでしまえば、それ、お前は日本晴で、可いことをして楽（たのし）むんじゃ。そううまくはきっとさせない。言訳がましいことを謂うな。聞くような吾でもなし。またお前だってそうだ。人殺（ひとごろし）よりなおひどい、（死んでくれれば可い）と思うほどの度胸のある婦人（おんな）でないか。しっかりとしろ！　うむ、お貞。」

お貞は屹（きっ）と顔を上げて、

「はい、決して申訳はいたしません。」

といと潔よく言放てる、両の瞳の曇は晴れつ。

旭光（きょっこう）一射霜を払いて、水仙たちまち凛（りん）とせり。

病者は心地好（よ）げに頷（うなず）きぬ。

「可（よ）し、よく聞け、お貞。人の死ぬのを一日待ちに待ち殺して、あとでよい眼を見ようというはずるいことだ。考えてみろ。お前は今までに人情の上から吾に数え切れない借があろう。それをな、その負債をな。今吾に返すんだ。吾はどうしても取ろうというのだ。」

いと恐しき声にもおじず、お貞は一膝乗出（のりいだ）して、看病疲れに繕わざる、乱れし衣紋（えもん）を繕いながら、胸を張りて、面（おもて）を差向け、

「旦那、どうして返すんです。」

「離縁しよう。いまここで、この場から離縁しよう。死にかかっている吾を見棄てて、芳之助と手を曳(ひ)いて、温泉へでも湯治に行(ゆ)け。だがな、お前は家附の娘だから、出て行(ゆ)くことが出来ぬと謂えば、ナニ出て行くには及ばんから、床ずれがして寝返りも出来ない、この吾を、芳之助と二人で負(おぶ)って行って、姨捨山(おばすてやま)へ捨てるんだ。さ、どちらでも構わない。ただ、(人の妻たる者が、死にかかってる良人を見棄てた。)とこういうことが世間へ知れて、世の中の者がみんなその気でお前に附合えば、それで可い、それで可い。ちっとは負債が返せるのだ。

しかし、これはお前には出来ぬこッた。お前は世間体というものを知ってるから、平生、吾が健全（たっしゃ）な時でも、そんな事は噯（おくび）にも出さないほどだ。それが出来るくらいなら、もう疾（とっ）くに離別（わかれ）てしまったに違いない。うむ、お貞、どうだ、それとも見棄てて、離縁が出来るか。」

お貞は一思案にも及ばずして、

「はい、そんなことは出来ません。」

病者はさもこそと思える状（さま）なり。

「それではお貞、お前の念（おも）いで死なないうちに、……吾（おれ）を殺せ。」

と静（しずか）にいう。

「え、貴下（あなた）を！」

「うむ、吾（おれ）を。お貞、ずるい根性を出さないで、表向（おもてむき）に吾を殺して、公然、良人殺しの罪人になるのだ。お貞、良人殺（ころし）の罪人になるのだ。うむお貞。

吾を見棄てるか、吾を殺すか、うむ、どちらにするな。何でも負債を返さないでは、あんまり冥利（みょうり）が悪いでないか。いや、ないかどころでない！　そうしなけりゃ許さんのだ。うむ、お貞、どっちにする、殺さないと、離縁にする！」

といと厳（おごそ）かに命じける。お貞は決する色ありて、

「貴下、そ、そんなことを、私にいってもいいほどのことがあるんですか。」

声ふるわして屹と問いぬ。

「うむ、ある。」

と確乎として、謂う時病者は傲然たりき。

お貞はかの女が時々神経に異変を来して、頭あたかも破るるがごとく、足はわななき、手はふるえ、満面蒼くなりながら、身火烈々身体を焼きて、恍として、茫として、ほとんど無意識に、されど深長なる意味ありて存するごとく、満身の気を眼にこめて、その瞳をも動かさで、じっと人を目詰むれば他をして身の毛を

よだたすことある、その時と同一（おなじ）容体（ありさま）にて、目まじろぎもせで、死せるがごとき時彦の顔を瞻（みまも）りしが、俄然（がぜん）、崩折（くずお）れて、ぶるぶると身震いして、飛着くごとく良人に縋（すが）りて、血を吐く一声夜陰を貫き、

「殺します、旦那、私はもう……」

とわッとばかりに泣出しざま、擲（なげう）たれたらんかのごとく、障子とともに僵（たお）れ出でて、衝（つ）と行（ゆ）き、勝手許（もと）の暗（やみ）を探りて、渠（かれ）は得物を手にしたり。

時彦ははじめのごとく顔の半ばに夜具を被（かつ）ぎ、仰向（あおむけ）に寝て天井を眺めたるまま、此方（こなた）を見向かんともなさずして、いとも静（しずか）に、冷（ひやや）かに、着物の袖も動かさざ

りき。

諸君、他日もし北陸に旅行して、ついでありて金沢を過（よぎ）りたまわん時、好事（こうず）の方々心あらば、通りがかりの市人に就きて、化銀杏（ばけいちょう）の旅店？　と問われよ。老となく、少となく、皆直ちに首肯して、その道筋を教え申さむ。すなわち行きて一泊して、就褥（しゅうじょく）の後（のち）に御注意あれ。

間（ま）広き旅店の客少なく、夜半の鐘声森（しん）として、凄風（せいふう）一陣身に染む時、長き廊下の最端に、跫然（きょうぜん）たる足音あり寂寞（せきばく）を破り近着き来（きた）りて、黒きもの颯（さ）とうつる障子の外なる幻影の、諸君の寝息を覗（うかが）うあらむ。その時

声を立てられな。もし咳（しわぶき）をだにしたまわば、怪しき幻影は直ちに去るべし。忍びて様子をうかがいたまわば、すッと障子をあくると共に、銀杏返（いちょうがえし）の背向（うしろむき）に、あとあし下りに入（い）り来りて、諸君の枕辺（まくらべ）に近づくべし。その瞬時真白なる細き面影を一見して、思わず悚然（しょうぜん）としたまわんか。トタンに件（くだん）の幽霊は行燈（あんどん）の火を吹消（ふっけ）して、暗中を走る跫音（あしおと）、遠く、遠く、遠くなりつつ、長き廊下の尽頭（はずれ）に至りて、そのままハタと留（や）むべきなり。

夜（よ）はいよいよ更けて、風寒きに、怪者の再来を慮（おもんばか）りて、諸君は一夜を待明かさむ。

明くるを待ちて主翁(あるじ)に会し、就きて昨夜の奇怪を問われよ。主翁は黙して語らざるべし。再び聞かれよ、強いられよ、なお強いられよ。主翁は拒むことあたわずして、愁然(しゅうぜん)としてその実を語るべきなり。

聞くのみにてはあき足らざらんか、主翁に請いて一室(ひとま)に行(ゆ)け。密閉したる暗室内に俯向(うつむ)き伏したる銀杏返の、その背と、裳(もすそ)の動かずして、あたかもなきがらのごとくなるを、ソト戸の透(すき)より見るを得(う)べし。これ蓋(けだ)し狂者の挙動なればとて、公判廷より許されし、良人を殺せし貞婦にして、旅店の主翁はその伯父なり。

されど室内に立入りて、その面(おもて)を見んとせらるる

とも、主翁は頑として肯(がえん)ぜざるべし。諸君涙あらば強うるなかれ。いかんとなれば、狂せるお貞は爾来(じらい)世の人に良人殺しの面を見られんを恥じて、長くこの暗室内に自らその身を封じたるものなればなり。渠(かれ)は恐懼(おそれ)て日光を見ず、もし強いて戸を開きて光明その膚(はだえ)に一注せば、渠は立処(たちどころ)に絶して万事休(や)まむ。光を厭(いと)うことかくのごとし。されば深更一縷(いちる)の燈火(ともしび)をもお貞は恐れて吹消(ふっけ)し去るなり。

渠はしかく活(い)きながら暗中に葬り去られつ。良人を殺せし妻ながら、諸君請う恕(じょ)せられよ。あえて日光をあびせてもてこの憐むべき貞婦を射殺(いころ)すなかれ。しか

れどもその姿をのみ見て面を見ざる、諸君はさぞ本意（ほい）なからむ。さりながら、諸君より十層二十層、なお幾十層、ここに本意なき少年あり。渠は活きたるお貞よりもむしろその姉の幽霊を見んと欲して、なお且つしかするを得ざるものをや。

明治二十九（一八九六）年二月

底本：「泉鏡花集成２」ちくま文庫、筑摩書房
　　１９９６（平成８）年４月24日第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第二巻」岩波書店
　　１９４２（昭和17）年９月30日発行
初出：「文芸倶楽部」
　　１８９６（明治29）年２月
入力：門田裕志
校正：土屋隆
２００６年７月３日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。